



神さまの守りの中で  
のびのび育つ子どもたち



宗教法人日本キリスト教団片瀬教会付属  
**片瀬のぞみ幼稚園**  
Katase Nozomi Kindergarten

**片瀬のぞみだよ  
り**

**2017年6月号**

## 6月主題聖句

# 「これは主の御業、 わたしたちの目には驚くべきこと」

詩編 118 編 23 節

牧師（設置者）磯部理一郎

片瀬教会付属「片瀬のぞみ幼稚園」の保護者の皆さん、そして園児の皆さん、今月は旧約聖書詩編 118 編のみことばから新しい発見や体験の喜びを学びます。片瀬のぞみ幼稚園は、教会幼稚園なので、「聖書」のみことばの光のもとに、こどもたちの成長を見つめ、保育の営みをしています。聖書のみことばによるスポットライトの中心には、いつも主人公となる園児ひとりひとりの成長が鮮明に照らし出されています。その一つ、幼稚園で毎朝行われている教師と牧師の始業礼拝では、毎日欠かさず、神さまのみ前に園児おひとりおひとりの個人名を挙げ、その成長のための感謝と祈りを捧げます。勿論、保育者の課題や成長も含め、また保護者の皆さんの日々安全無事の生活も視野に入れ、保育主題が月ごとに設定され、聖書のことばの光のもとで保育は進められます。園児の皆さんも、皆で主題となる聖句を暗誦することで、可能な限り自覚的に、自らの成長にスポットライトをあて、自己の成長と日々格闘しています。こどもたちは、日々それぞれに集団の中であって、「成長のための格闘」を余儀なくされます。その格闘は、成長を見守る側の目には涙を禁じ得ないほど、感動に満ち溢れています。まさに「これは主の御業（みわざ）、わたしたちの目には驚くべきこと」（詩編 118 編 23）そのものです。「聖書」のみことばに照らされて初めて見えてくる世界は、果たしてどのような世界なのでしょう。また

日々聖句を暗誦することで、自覚的に取り組まれるこどもたちひとりひとりの目には、果たしてどのように、自分の成長の姿は映っているのでしょうか。

そこで先ず、今月の保育主題聖句を、前後の文脈からも読み解けるように、少し前の部分からご紹介いたしましょう。最後の 118：23 が今月保育主題に選ばれた聖書のみことばです。

118:5 苦難のはざまから主を呼び求めると／主は答えてわたしを解き放たれた。

118:6 主はわたしの味方、わたしは誰を恐れよう。人間がわたしに何をなしえよう。

118:7 主はわたしの味方、助けとなって／わたしを憎む者らを支配させてくださる。

118:8 人間に頼らず、主を避けどころとしよう。(中略)

118:13 激しく攻められて倒れそうになったわたしを／主は助けてくださった。

118:14 主はわたしの砦、わたしの歌。主はわたしの救いとなってくださった。(中略)

118:21 わたしはあなたに感謝をささげる／あなたは答え、救いを与えてくださった。

118:22 家を建てる者の退けた石が／隅の親石となった。

118:23 これは主の御業／わたしたちの目には驚くべきこと。

つまり「驚くべきこと」とは、「主は呼び求めると、主は答えてわたしを解き放たれた、激しく責められて倒れそうになったわたしを主は助けてくださった、主はわたしの砦、わたしの歌、主はわたしの救いとなってくださった、あなたは答え、救いを与えてくださった」という、言わば「人生の根源」となる発見と経験にあることが分かります。つまり教育の本質は、教育基本法が示す通り、健やかな「人格の完成」にあります。その人格の基や根源は、基本的には幼児教育で育まれます。自らの命の肯定は勿論、これからも住み生きてゆく世界の「絶対肯定」です。この世界に生まれて生きることがどれほど素晴らしく感動に溢れる世界なのか、愛され愛し合う喜びがどれほど深く豊かであるか、未来に希望と勇気をもって生きる頼もしさ等、「生きることの絶対肯定」を魂の深みにおいて発見し経験して獲得することに大きな意味があります。この人格形成過程での「絶対肯定」を、聖書のみことばは「神の愛」「神の救い」という大変豊かな美しいことばで表現します。あなたは、わたくしも、神さまの無限の愛によって愛され、守られ、救われて、生まれ生きている！という確信を、三つ子の魂百までと言われる幼児期に、人格の根底に獲得することができていれば、どんなに辛く悲しいことがあったとしても、自分や世界を愛し信頼し、希望を捨てることなく、生きてゆける、と思うのです。

4月「ナルドの会」(毎月第一火曜日・朝の保護者聖書研究会)では、神さまの創造と愛着について共に学びました。ポウルビィの愛着論を深く掘り下げると、結局は「愛されていること」よる絶対肯定に辿り着きます。まさしくわたくしたち人間と世界万物を、全知全能の神が無限の愛によって絶対肯定しておられる、という

のが、聖書の主題と言えます。どの子の家庭もまたどの夫婦も、見えない神の絶対の愛によって守られ導かれています。そうした見えない神の愛と救いに包まれて、世界は守られ、成長し、自己を実現しているのです。花は花として、鳥は鳥として、魚は魚として、それぞれがオンリーワンの誇りと尊厳に満ち溢れて、自己を全うしているのではないのでしょうか。まさに世界は「これは主の御業、わたしたちの目には驚くべきこと」（詩編 118 編 23 節）に満ち溢れています。保育の中で「伸び悩み」と苦闘する子と出会うことがあります。本来は成長と実現の格闘ですが、余りにその格闘の課題が重く或いは辛いので、集団の中に飛び込むことをやめてしまったり、あそびに加わることも、また時には「わたし（ボク）も」とことばを出すことさえもやめてしまう子を見かけます。しかし、魂の底から探し求めているのです。神の「愛と救い」という人生の絶対肯定を。そしてついに誰もが「わたしの皆、わたしの歌、私の救い」という絶対の存在肯定と出会い、成長して生きる喜びを知るのです。